

本薬師寺旧境内の調査

—第181-1次

1 はじめに

本調査は住宅建設にともなう事前調査である。調査地は、本薬師寺旧境内西北隅部、七条大路にあたる。

周辺では、2001年度に本調査地の西側で発掘調査がおこなわれ（飛鳥藤原第114-3次調査）、掘立柱塀2条、建物1基、溝2条を検出している。本調査では、七条大路南側溝および第114-3次調査で確認した掘立柱塀の延長部分の検出が期待された。

調査区は、南北18m、東西7.5mの逆L字形である。調査期間は2014年4月3日から4月16日である。

2 調査成果

基本層序

基本層序は、表土、黄褐色砂質土、黄褐色粘質土、灰褐色砂質土で、遺構は黄褐色砂質土上面で検出した。地表面から遺構検出面までの深さは約0.7m。黄褐色砂質土中から藤原宮期の軒平瓦が出土し、藤原京造営以後の整地層であることが確認された。整地土は南に進むほど薄く、調査区南半ではすでに削平され、遺構は灰褐色砂質土上面で検出した。灰褐色砂質土以下は、北方向に傾斜して堆積する様子が確認され、途中に粒子の粗い砂層を挟むことから、自然堆積土と判断した。

検出遺構

斜行溝SD470 調査区北部で検出した。北西－南東方向の斜行溝。幅約2.3m、深さ0.3m。埋土は大きなものでこぶし大程度の礫を含む粗い砂礫で、ごく短期間に流れたものとみられる。

土坑SK471 調査区西南隅で確認した土坑。南北1.1m、東西は0.7m以上。埋土より7世紀前半から半ばまでの土師器杯Gや小型甕が出土した。

土坑SK472 SD470の埋土上面で検出した。直径約0.8mの円形で、深さは遺構検出面から約0.1mを測る。

土坑SK473 調査区北端で検出した。東西に長い土坑で南北約1.0m、東西1.6m以上である。埋土より中世の土師器小皿、瓦器碗などが出土した。（大林 潤）

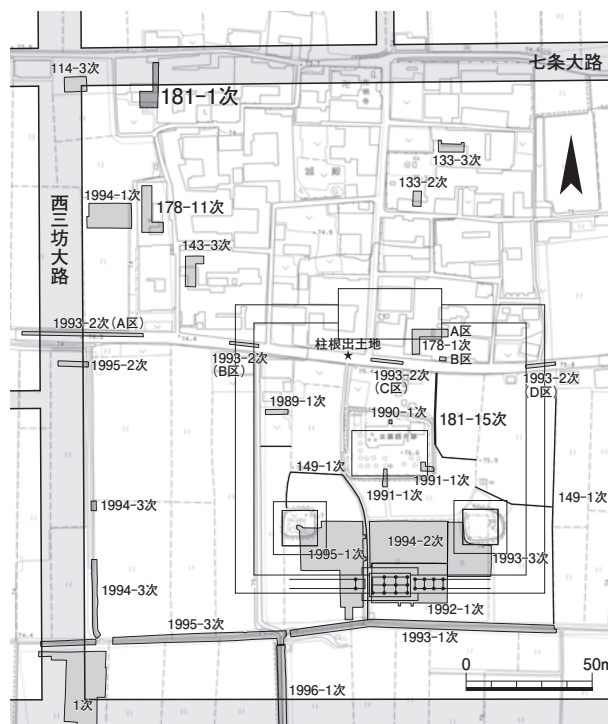


図154 第181-1次調査区位置図 1:3000

3 出土遺物

土器類は検出遺構とともに説明したとおり。瓦類は、軒丸瓦1点、軒平瓦1点、丸瓦8点（1.13kg）、平瓦37点（4.61kg）、鬘斗瓦1点、不明道具瓦1点が出土した。軒丸瓦は近世以降の巴紋で表土出土。軒平瓦は範の脇区を削り落とした後の6641Hbで黄褐砂質土出土（図155）。灰色から灰白色を呈し硬質、胎土は精良で砂粒をごく少量含む。顎部は長さ7.7cm、段の高さは0.6cm程度と低い。凹凸両面ともに瓦当付近に丁寧な横ナデ、顎面は横ないし斜めナデをほどこす。牧代瓦窯産であろう。6641Hは本薬師寺造営段階から製作されたもので、6276Aaと組んで本薬師寺と平城薬師寺で使用される。

鬘斗瓦はSK473出土。幅18.0cm、残存長21.0cm。凸面に縦縄叩き、凹面は摩滅が著しいがわずかに布圧痕、模骨痕が残る。焼成前に平瓦を半截する。（清野孝之）

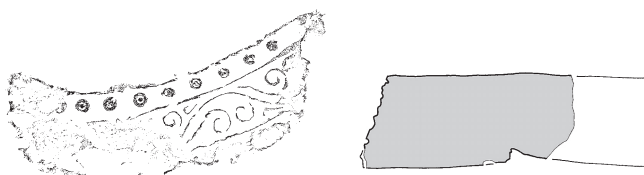


図155 第181-1次調査出土軒瓦 1:4

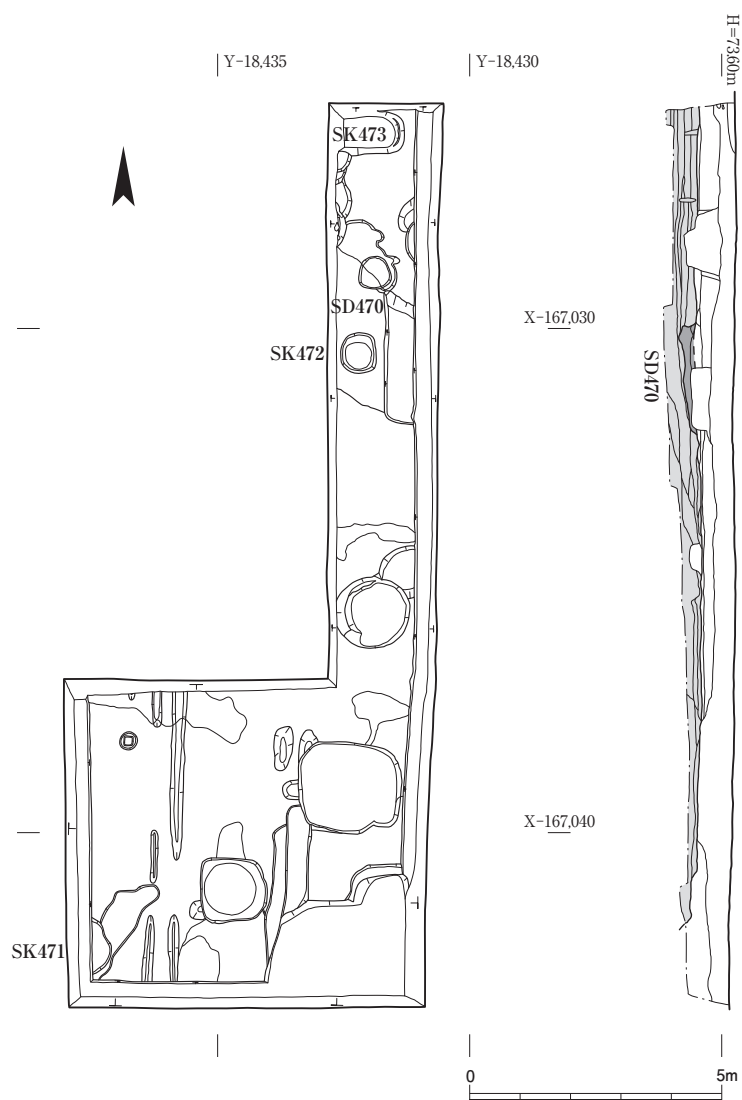


図156 第181-1次調査遺構図・土層図 1 : 150

4 まとめ

今回の調査では、古代とみられる遺構は、斜行溝、土坑2基で、他に中世の土坑1基を検出した。

本調査地内で検出が予想された七条大路南側溝および、第114-3次調査で確認した掘立柱塀（SA430）の延長部分は検出されなかった。SA430は本薬師寺の北面大垣の可能性が指摘されており、柱間隔は約8尺（2.4m）である。本調査区北半の東西幅は最大2.3mあり、仮にSA430の東延長部分があるとすれば本調査区内で確認されるとみられていた。今回SA430と思われる柱穴は確認できなかったが、SA430の東延長部分が本調査区周辺まで延びていなかったとみるほかにも、延びてはいるが本調査区周辺では柱間寸法が8尺以上あり調査区内に柱穴が位置していない、SD470に破壊されて残存しない、などの可能性が残る。いずれにしても、本調査区は非常に狭長であり、北面大垣の延長部分および、七条大路南側溝の確認は、今後の周辺区域における発掘調査の課題である。

（大林）



図157 第181-1次調査区全景（北から）